



次のとおり。(主に伊奈波神社報 6号「岐阜市歴史博物館 寛真理子学芸員」寄稿から)

- ・享保 10 年 (1725) 3 月：上大桑町では白髪・東材木町では邯鄲 (かんたん) のからくりが。
- ・文政 10 年 (1827) 岐阜奉行の考えで狂言を止めて山車だけになった。
- ・このころ本居太平 (宣長の養子) の祭礼を見た長歌が伊奈波神社に伝えられている。遠近の人が道に垣をなして見物し、泰平の御代を喜び、伊奈波神社の神威を尊ぶさまを詠んでいる。
- ・幕末の尾張藩士の絵には見物する群衆・からくりの山車・10 歳以下の踊り子が乗る踊り山車などが、また木版印刷物には 27 輛の山車・踊り山車・カラクリ山車・鷹狩の仮装行列・神輿・櫛などが。
- ・明治 6 年 (1873) 太陽暦の採用で祭礼が 3 月から 4 月に変更した。
- ・明治 23 年：カラクリ山車 8 輛、踊り山車 3 輛、3 ケ町の作り物、神輿 2 基が練り出された。
- ・その後 30 輛近くあった山車や神輿は、濃尾震災で大半を失い、大正 10 年 (1921) 前後には、にわか山車 12 基と 80cm を超す大行灯神輿が出た記録あり。
- ・昭和 20 年 (1945) 7 月 9 日の岐阜空襲で山車や神輿を焼失した。
- ・現在の安宅車・清影車・蛭子山車・踊山車の 4 輛は、濃尾震災以降に新造・改修され、空襲で焼失を免れた貴重な祭りの財産である。

(注：濃尾大震災は明治 24 年 (1891) 10 月 28 日朝 6 時半ごろ発生した、マグニチュード 8.0 の大地震。伊奈波神社は、神輿庫 1 棟を残すすべて焼失した。翌年から復興が始まり、明治 30 年 (1897) に本殿、昭和 8 年 (1933) に拝殿、昭和 16 年 (1941) に楼門などが完成し現在に至っている。)

### 3 「伊奈波神社祭礼」と岐阜まつり

伊奈波神社の例祭は、毎年 4 月 4 日～5 日に神事が行われるようになった。4 日は宵宮、5 日の本祭には、御神幸の隊列が金神社、樞森神社へ渡御される。この隊列は主神の「いにしきいりひこのみこと」の御霊をお祀りした神輿を神職が先導し、御鳳輦 (ごほうれん)、猿田彦神、楽人、旗持ち、神輿、宮司、責任役員、総代、神職、稚児、巫女らが伝統の装束や袴を着て隊列を整える。そして、奥様 (ぬのしひめのみこと) の金神社、お子様 (いちはやおのみこと) の樞森神社へ渡られる巡幸の神事である。

しかし近年になると、伊奈波神社の例祭に合わせ、市内各地の神社も祭礼日を 4 月 5 日とし「岐阜まつり」と呼ぶようになった。そのような中で、伊奈波神社の本祭は、曜日に関係なく毎年 4 月 5 日に行われ、神幸祭と宵宮は、岐阜まつりの総合的な観点から 4 月の第一土曜日に執り行われるようになった。

#### 伊奈波神社例祭と祭礼に伴う関連行事

「岐阜市無形民俗文化財」に指定される

☆ 指定された時期：平成 31 年 3 月 (令和元年)

☆ 指定された範囲：伊奈波神社例祭・神幸祭・宵宮・山車奉曳とからくり奉芸  
神輿奉納など *(花火)*

#### 語り継がれる物語

第 11 代垂仁 (すいにん) 天皇が、皇后の日葉酢媛命 (ひばすひめのみこと) との間に生まれた二人の皇子に望みを尋ねたところ、兄の五十瓊敷入彦命 (いにしきいりひこのみこと) は弓矢を、弟の大足彦尊 (おおたらしひこのみこと) は皇位を望んだ。

天皇はその希望をかなえ、兄皇子に弓矢を賜り、弟皇子は垂仁天皇が亡くなった後に即位して景行 (けいこう) 天皇 (第 12 代天皇) となった。景行天皇は兄のミコトを大変重んじたが、兄弟の仲を裂こうとした陰謀により、兄ミコトは因幡守 (いなばのかみ) として赴任させられる。

一方、都では天皇家の宝剣が毎夜姿を消すという大事件が起こり、占ったところ剣が奥州の金石に逢いに行くことがわかった。そこで金石を都へ召し寄せれば解決すると命じ、向かった日本武尊からも失敗に終わり、最後に兄ミコトが命ぜられて因幡国の兵とともに奥州に向かう。

金石を渡したくない奥州の民は、同形の石を八つ集めるという計略をめぐらせたが、ミコトは「鏡を石にあてたとき、鏡が破れば本物」との、亡き母后のお告げにより、金石を見分けることができた。これは高さ約 1.1 メートル、周囲約 2.4 メートルの丸石であった。

ところがそれを都に運ぶ途中で、ミコトの成功をねたんだ者の陰謀により、景行天皇がミコトを討つために大軍を派遣した。両者が対戦したのが美濃国厚見郡 (岐阜市南部で現在の金華・京町地区も含まれる) である。

戦いの中、金石は椿原に安置されていたが、一夜で高さ約 110 メートルの山となり、ミコトとその王子たちはそこに姿を隠した。この膨れ上がった山が一石山 (金華山) といわれる。江戸時代は因幡山・金華山どちらも使われていた。(金山・破鏡山、金化山と呼ばれたことも・・・)

兄ミコトは、因幡大菩薩となって衆生に利益を施した。奸計を信じて兄を討伐してしまったことを知った景行天皇は、椿原の麓に社壇を造らせ、ミコトと王子たち、母后の日葉壽司媛命 (ひばすひめ) を祀らせた。これが伊奈波神社の始まりと伝えられ、以後、天文 8 年 (1539) に齊藤道三により伊奈波神社は現在の地に移された。椿原 (現在の岐阜公園丸山) は、伊奈波神社の旧社地で、現在は石基が祀られ、毎年お祭りが行われている。

### 2 伊奈波神社お祭りの歴史

伊奈波神社の祭礼で記された一番古い史料は室町時代のもので、延文 4 年 (1359) の本縁起に 3 月 3 日から 6 日まで近郊の僧侶たちが集まり、八講 (法華八講会) をつとめたとある。また、明応 5 年 (1496) 3 月 3 日の記録で「伊奈波神社の祭礼が近年衰えてきたことを神様が夢のお告げで嘆かれていますので、昔どおり盛んにする」と記されている。

(注) 法華八講とは、法華経 8 巻を 1 巻ずつ 8 回に分けて講義し賛嘆する法会で、略して「八講」ともいう。起源は中国とされ、日本では延暦 15 年 (796) 奈良の石淵寺で 4 日間法華経の講義をしたのが最初といわれる。

江戸時代はじめ、慶長年中 (1596～1615) には、岐阜町全体で 24 輛の山車が曳かれるようになったが、16 世紀末から衰退し山車は 2 輛だけになったと記されている。まつりの変遷記録はおよそ

(注) 渡御は神幸祭とも呼ばれ、御分霊が伊奈波神社から金神社、樞森神社などへ渡られることをいう。

伊奈波神社(午後0時)⇒金神社(0時40分頃) 御旅所祭⇒伊奈波・金・樞森三社合同祭典(若宮町交差点)⇒樞森神社(午後2時20分頃) 御旅所祭⇒赤口神社(本郷)⇒伊奈波神社(午後4時20分頃)

## 4 宵宮(よみや)

夕闇迫る桜満開の参道を、市の重要有形民俗文化財に指定された4台の山車と多数の神輿が、迫力ある和太鼓が打ち鳴らされるなか、大勢の見物の人々に見守られ、参道から神社広場へと練りこむ、活気あふれるお祭りである。

山車には多くの提灯がつけられ、その提灯を前後左右に揺らしながら、まつり提灯がともされた参道を進む幽玄の姿と、迫力ある担ぎ手の掛け声で進む神輿の躍動感あふれる姿は感動的である。

神社広場での神輿の総練りこみ、山車のカラクリ上演、そして祭りのクライマックスに打ち上げられる幻想的な奉納花火が感動を最高潮に盛り上げる。

伊奈波神社の宵宮が、いつから始まったかは不明であるが、次代の変遷はあってもカラクリ山車、踊り山車、本神輿などが奉納される神事として、昔から伝統として受け継がれている。

近年は、宵宮実行委員会運営のもと、百数十個の提灯で飾られた神社広場ステージでの「まつり太鼓」の演奏で始まり、山車4台は伊奈波通りに引き揃え、また勇壮な神輿(毎年10数団体が参加)は木造町の神輿広場に集結したあと、参道にゆらぐ祭提灯と多くの市民が見物するなかを神社広場へと、そのあと広場では威勢のいい神輿連の練りこみ、山車の優雅なカラクリなどが奉納され、市民と一体になった宵宮に発展している。

この宵宮の発展にご尽力された神社関係の方々、運営に携わる歴代の先輩諸兄、山車・神輿の関係団体、氏子・町内の皆さんに深く感謝申し上げます。

- ・宵宮スタート(18:00) 太鼓演奏(高富青雲組・岐阜中央中学校)
- ・山車入場(19:00) 安宅車・清影車・若戎車・踊り山車(入場順位は毎年入れ替わる)
- ・神輿入場(19:30) 神輿(10数台)の練りこみと総見(入場順位は毎年交替で)
- ・からくり奉芸(20:15) 安宅車・清影車・若戎車(奉納順位は毎年入れ替わる)
- ・フィナーレ(21:00) 宮司、来賓あいさつ奉納(打ち上げ・仕掛け)

### (注1)「宵宮」(よみや)

全国的に神社や地方によって「宵宮」「夜宮」「宵宮祭」と呼ばれており、形態の相違はあるものの、例祭の前夜に行う祭りで、本来は真夜中に重要な祭儀が行われていた。後世は前夜祭または翌日の準備行事とみられる例が多くなった。

「宵宮」を「よみや」と読まれているが、全国的には「よみや」と読まれる比率が多いと言われ、歴史民俗用語辞典では「宵宮」を「よみや」と表現されている。岐阜市における重要無形民俗文化財指定時(令和元年)の文書やマスコミの報道などでも、宵宮とフリガナがつけられている。

市民の付け祭りの意味も込めて「宵宮(よみや)」と呼ぶとの説もあるが、宵宮実行委員会では、伊奈波神社の古代からの伝統的な神事「よみや」と呼んでいる。

### (注2) 雨天時の「よみや」

神社が山車を所有し、山車の奉曳を閉ざさないため、かつては雨天の場合は中止でなく順延になっていた。しかし近年では、順延の場合には観客が少なくなり、各山車とも奉曳の動員や費用の対応に苦慮してきたことなどから、平成28年4月からは順延はなくなった。

### (注3) 宵宮実行委員会の発足

平成7年(1995): J C卒業生が中心となったボランティア集団で宵宮実行委員会(委員長 吉田豊元県教育長)を組織し発足。

現在は伊奈波神社神職・総代、自治会、山車・神輿団体、女性団体、まちづくり団体などの代表およそ30名で構成している。

### (注4) 米屋町での「まわりこみ」

かつては山車が米屋町の交差点にさしかかると、車力の頭の柏子木が大きく鳴り響き、その合図で笛方の一段高い笛の音で、囃子は「道ゆき」から「車切」、そして「早神楽」へと変わっていく。そして車力が前輪を浮かせ、芯にあたる車輪を点として、力に任せにくるくると回す。どの町内も山車を囃子にうまく合わせて、何回廻すかを競い合った。

近年も、同じように行われているものの、人口の減少や高齢化などの社会現象の変化に伴って、山車奉曳持ち回りの担当地区によっては、お囃子の子ども、あるいは車力を担当する青年達の確保などに苦労しているところが出てきている。

## 5 宵宮への山車・神輿

### [ 山 車 ]

☆ 安宅車(あたくしゃ): 昭和33年(1958) 岐阜市重要有形民俗文化財指定

嘉永年間(1848~1854)に信濃諏訪の名工といわれた二代目諏訪四郎富昌が弘化元年(1844)に造ったといわれ、形式・形状は大唐破風造りの屋根を持つ上、中、下段の3段式で、中台が屋台先になっている典型的な「名古屋形」になっている。

安政大地震(1855)で大破し、以来修復を繰り返し、明治21年(1888)に大改修が行われた。そして、弁慶義経の能狂言「安宅」を舞う「からくり山車」に変わった。

金華地区の16地区が、毎年2地区単位の持ち回りで奉曳している。

☆ 清影車(せいえいしゃ): 昭和54年(1979) 岐阜市重要有形民俗文化財指定

江戸時代末の立川流宮大工2代目立川和三郎の作といわれ、漆塗装の無い白木造りの山車で、謡曲「玉ノ井」を舞う「からくり山車」。伊勢湾台風で「からくり」を失ったが、平成11年に復活し、能狂言仕立てで面かぶり・大人形・前人形の3体が舞う。

京町地区の7地区が持ち回りで奉曳している。

☆ 蛭子車(ひるこしゃ): 昭和54年(1979) 岐阜市重要有形民俗文化財指定

大唐破風造りの屋根を持つ名古屋形で、4台の山車の中では一番大きく、最も古い山車といわ

れる。約 200 年前の采振り人形と 150 年ほど前の作といわれる巫女人形が、能の岩舟の曲を演じる「からくり」山車である。

明德地区 17 町内で組織された奉賛会で奉曳している。

☆ 踊山車 (おどりやましゃ) : 昭和 54 年 (1979) 岐阜市重要有形民俗文化財指定

屋根や中段の屋台先が無く、上段の床の周囲に手すりがついていて、そこにかけては、芸鼓衆が乗り、鳴り物や手踊りをした華やかな山車であった。

現在は、ボーイスカウト岐阜第 16 団が奉曳している。

[ 神輿・みこし ] (順不同)

☆ 岐阜陸神輿 : 金神社の御輿会として活躍、「よみや」には平成 6 年から参加。

☆ 岐阜青年みこし : 岐阜市政 120 周年を記念し、各地からの青年で結成し担ぐ。

☆ 岐阜祭絆会 : 浅草浅游会、島根祭絆会、郡上炭火一家の 3 団体の加勢で組織し担ぐ。

☆ 松阪太鼓 : 岐阜神輿連との縁で、三重県松阪市から毎年参加していただいている。

☆ 神輿愛好会まっしぐら : 祭りや神輿が大好きな仲間と結成し 19 年目、他県へも参加。

☆ 神加勢 : 加納天満宮の御輿団体、大御輿「金華山」は鳳凰までの高さが 2.5m も。

☆ 女神輿「岐阜心女」 : 祭りや神輿が大好きな女性の皆さんで担ぐ、艶やかで粋な神輿。

☆ 木造「町神輿」 : 江戸時代の末期に造られ、「よみや」参加の中では一番歴史のある本神輿。

☆ 金華神輿 : 金華地区の有志で、参加団体の中で最も多い人数で担ぎ、練りこみの最終を飾る。

☆ 平成 18 年には三重県松坂市から「松坂御輿」が特別に参加していただいた。

< 岐阜神輿連 = 平成 7 年 9 月 : 金華神輿、木造「町神輿」はじめ 7 団体が結成された。

(注 1) 本神輿・つくりみこし

本神輿の例で、木造町の本神輿には三つの特徴がある。一つは釘が使われていない。そのため町を練ってあるくと、ギシギシと木のきしむ音が聞かれ、その音色が誇りである。二つ目は菊の紋章がついていることである。三つ目は神輿の造りだす音色である。木のきしむ音と鈴の音、さらに鳳凰の尾が屋根に触れ奏でる音が響きあって勇壮な調べをかもし出す。

今では、各地に見られるように、かつて神輿に見られた町民意識も変容し、文化財としての御輿を保存しているという意識に変わってきているものが多いと思われる。

つくりみこしは、時勢を反映したものが多く、かつては戦勝記念でつくったものや、今では「まちづくり」「青少年育成」「交通安全」などを反映した「つくり神輿」が担がれている。

[ 神輿 ]

神様が乗る輿から「神輿」と書かれるが、「御輿」と書かれる場合もある。これは輿に丁寧語の御をつけたもので、通常はさらに「御」をつけて「おみこし」と呼ばれる。

元々「輿」は、貴人の乗り物を指したが、平安時代中期頃から怨霊信仰が盛んになり、神霊を運ぶものとして「神輿」が使われるようになった。

神輿を曳くわけは、一般的には神様の魂を神輿に乗せ、街中をめぐり神様が持っている「偉大な力を振りまいて、その地域を清める」の意味がある。

・ 神社神輿 = 本神輿

・ 氏子町会神輿 = 町会神輿

・ 青壮年部が担ぐ神輿 = 大人神輿

・ 女性が担ぐ神輿 = 女神輿

・ 子どもが担ぐ神輿 = 子供神輿

(注 2) 山車 (「だし」あるいは「やま」と呼ぶ。)

お祭りに、車の上に様々な飾り物をつけて引き出すものをいう。またその上に人が乗って、芝居を演じたり、踊ったり、お囃子を奏でたりする台で、引綱で引張る。関東では「屋台」、関西では「だんじり」と呼んでいる。

多くは屋根の上に鉾や長刀をつけている。神様を守る鉾や長刀には神霊が宿っていると考えられている。それらを付けた山車は神輿と同じく神様の乗り物である。

また、山車の名称からもわかるように、神霊は山にあるという通念によって、山の作り物という意味がある。山車を「やま」と呼ぶのも、そのためである。

祇園祭の山鉾、秩父の夜祭り、高山祭の山車が有名である。

(注 3) 「会所」「やまおろし」

会所は、お囃子や「からくり」練習の場所で、毎年 3 月の中旬になると会所開きが行われ、約 1 週間毎晩練習が行われ、その間、お囃子には指導員や子ども会の役員、保護者がつきそい、「からくり」には保存会皆さんの運営で、当番町内の人たちが見物と激励に訪れる。

「やまおろし」は、祭りの後始末のあとの、参加した人たちの慰労会である。宵宮の終了後に神社参集殿で行う地元御輿団体、日曜日に山車を倉庫に収めた後に、境内の桜を楽しみながら親睦を深める団体、料理店に会場を設営し慰労会を行う団体など様々である。

## 5 岐阜まつりと道三まつり

岐阜市民の氏神である伊奈波神社や金神社をはじめ市内各所の神社が、毎年春に行う「例祭」にあやかり、市民も祭りを楽しもうと始まったのが「岐阜まつり」の由来である。

昭和中期頃までは、当日は祭り一色に塗りつぶされ、各町内では、大人も子供も神輿を担いだり、各家庭ではご馳走を作り親戚を招くなどしてお祝いをした。

斉藤道三という人物が見直され、その遺徳をしのぶ「道三まつり」が岐阜まつりに合わせて行われるようになったのは昭和 48 年 (1973) からである。

そのきっかけになったのは、昭和 48 年 1 月から始まった NHK ドラマ「国盗り物語」で、これを契機にドラマの舞台となる岐阜を PR しようというものであった。

斉藤道三にちなんだ催しが初めて行われたのは昭和 47 年の信長まつりからであるが、「国盗り物語」は昭和 48 年の岐阜まつり (4 月 4・5 日) のころ、道三最後の登場場面を迎えることから、同年は道山関係の行事を信長まつりから切り離して、岐阜まつり協賛として実施し、ブームを盛り上げることとなった。これが「道三まつり」の始まりである。

この年は、道三の菩提寺である常在寺 (岐阜市梶川町) で斉藤道三公追悼法要などが行われ、多くの人で賑わった。これを第 1 回として、毎年岐阜まつりの協賛行事として開催され、その後「歩行者天国」など多くの行事も加わって華やかさを増すこととなった。また、昭和 51 年 (1976) 第 4 回

開催時には青年会議所が「みこし」を担ぎ出し、これがきっかけに今日の「みこしパレード」が形成されることとなった。

こうして岐阜まつりに合わせて、毎年4月4・5日に行われてきた道三まつりも、平成8年(1996)第24回から4月の第一土曜と翌日曜の2日間に日程を変更して開催されるようになった。

以上

伊奈波神社五島権宮司様のご指導をいただきました、厚く御礼申し上げます。

なお記事には、不詳・不備な点があると思いますので、皆様からの指摘・助言によって、充実できれば幸いです。

令和3年1月 リポート

宵宮実行委員会相談役 藤澤眞一

<関連資料～1> 伊奈波神社のご祭典

祭典月	期日	祭典	内 容
1月 睦月	1日	歳旦祭	元日の早朝に行われる年頭の祭り 豊作物や養蚕、天候を占う特殊神事 注連縄、門松などの正月飾りを炊き上げる
	3日	元始祭	
	15日	筒粥神事	
	17日	左義長神事	
2月 如月	3日	節分祭	乱玉・大筒・中筒・小筒の煙火打ち上げ
	3日	手筒煙火奉納祭	
	11日	紀元祭	
3月 弥生	旧暦 旧初午	花の撓大祭 楓稲荷神社初午祭	五穀豊穡、産業振興を祈願する祈年祭
4月 卯月	5日	神幸祭	金神社・櫃森神社へ渡御される 伊奈波神社の本楽
		例大祭	
5月 皐月	15日	大黒社例祭	大黒様の商売繁盛、福德円満、延命長寿御神徳を
6月 水無月	10日	和歌三神社献詠祭	短歌、俳句の応募から入選作品を奉納
7月 文月	24日	黒龍神社祭	雨水をつかさどる神 罪穢れを祓い清める
	30日	松尾神社祭	
	30日	みそぎ神事	
8月 葉月	14日	須佐之男神社祭	
	14日	笹提灯奉納祭	
9月 長月	14日	花の撓講社祭	
	15日	末社祭	
	15日	敬老祭	
	23日	忠魂碑慰霊祭	
10月 神無月	1日	物部祭	伊勢神宮の神嘗祭当日に行われる
	17日	神嘗祭	

11月 霜月	3日	明治祭	明治神宮の例祭日で奉祝される
	7日	峰本宮祭	
	上旬	金山神社祭	
	下旬	大麻・神符頒布始祭	
12月 師走	1日	新嘗祭	天皇誕生日で祝賀の祭り
	15日	御神楽祭	
	23日	天長祭	
	31日	大祓神事	
	31日	除夜祭	
毎月	1日	月次祭	

<関連資料～2> 伊奈波神社境内社

☆いなば大黒社：祭神・大己貴神（おこなむらのかみ）・（大国主神）

宝永6年（1709）の鎮座以来、大国主命をまつり、福德円満、医薬治病、延命長寿、商売繁盛の神として崇敬。例祭日は5月15日。

☆黒龍社：最新・高龍神（たかおかみのかみ）

雨水をつかさどる神で、福德増進の神徳から、神燈を捧げる。例祭日は7月24日。

☆吉備神社：祭神・吉備津彦命（きびつひこのみこと）

吉備国（岡山県）を平定した功業の神で、当地に招かれ服飾・和洋裁・手芸の守護神として名高く、針供養の古い針を納める針塚がある。例祭日は2月8日。

☆楓稲荷神社：祭神・宇迦之御霊神（うかのみたまのかみ）

稲穂の靈魂をまつり、商売繁盛、健康増進など。例祭日は旧暦初午。

☆松尾神社：祭神・大山作神（おおやまぐいのかみ）市杵島姫命（いちきしまひめのみこと）

大鳥居前の池の中に鎮座される。

<関連資料～3> 社格について

伊奈波神社は明治6年に県社に列格し、昭和14年に国幣小社に昇格した。

① 官国幣社（官社）

官幣大社 62社

国幣大社 6社

官幣中社 26社

国幣中社 47社

官幣小社 5社

国幣小社 44社

別格官幣社 28社

（注）伊勢神宮は最尊貴として対象外

② 諸社（民社）

府社・県社・藩社 1, 148社

郷社 3, 633社

村社 4, 493社

無格社 59, 997社

以上